

場所を表す形式名詞の用法と制限

—主要部名詞としてのアタリとトコロ—

九州大学文学部人文学科
言語学・応用言語学専門分野
1LT12087E
2012（平成24）年入学
塚元博子
2016（平成28）年1月提出

要旨

場所を表す形式名詞アタリとトコロには「周りに内緒で準備を進めるアタリ／トコロが彼らしい」といった主要部名詞としての働きがある。しかし、両者は常に交替可能であるとは言えない。本論文ではこの用法におけるアタリとトコロの使用の制限についての考察を、両者の前接要素と後接要素の2つに分けて行った。その結果、アタリは形容詞・連体詞といった、事物を形容する側面が強い品詞が前接する場合と格助詞ガ、格助詞ヲ、格助詞ニ以外の格助詞が後接する場合に容認度が制限されるという結論に至った。一方トコロは前接要素に目立った制限はないものの、格助詞ガ、格助詞ヲ、格助詞ニ以外の格助詞が後接する場合と、トコロの後に格助詞を伴わずに読点が続く場合に容認度が制限されるという結論に至った。本論文ではアタリとトコロの容認性の違いはこれらの制限の違いから生じるものと結論付けている。

目次

要旨	i
目次	ii
1. はじめに	1
2. 先行研究	2
2.1. 田窪(1984)	2
2.2. 田窪・笹栗(2002)	2
2.3. 益岡・田窪(1995)	3
2.4. 砂川(1999)	3
2.5. 青木(2000)	4
2.6. 中村(2001)	5
2.7. 形式名詞+ダのアスペクト的意味	6
2.8. 時間節で用いられるトコロ	6
2.9. 本論との位置づけ	7
3. 前接要素の制限	8
3.1. 品詞	8
3.2. 格助詞ノ	12
4. 後接要素の制限	15
4.1. 格助詞	15
4.2. 読点	17
5. 本論のまとめ	20
参考文献	23
付録. 格助詞と用法の対応	24
謝辞	26

1. はじめに

以下の例文の中で、形式名詞アタリとトコロは置き換えが可能である。

- (1) a. 周りに内緒で準備を進めるアタリが彼らしい
- b. 周りに内緒で準備を進めるトコロが彼らしい

しかし、同じ用法であっても、必ずしもアタリとトコロが置き換え可能とは限らない。

- (2) a. この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい
- b. ?この町は住人が減ってきていて、そのトコロが少し寂しい

- (3) a. *見返りを求めない健気なアタリが彼女らしい
- b. 見返りを求めない健気なトコロが彼女らしい

- (4) a. 窮地に立たされても決して諦めないアタリ、彼の粘り強さを感じる
- b. *窮地に立たされても決して諦めないトコロ、彼の粘り強さを感じる

(1)～(4)に構造上共通しているのは形式名詞アタリとトコロが主要部名詞として働いている点と、XアタリY、XトコロYという文構造になっているという点である。内容においては、どれもXである事物の要素・特徴を述べ、Yでそれに対する評価・意見を述べているが、条件によって置き換えが不可能であったり容認度が下がったりする例が見られる。そこで、本論文では以下の問題を扱う。

- (5) 形式名詞アタリとトコロは、それぞれどのようなときに主要部名詞として使用可能で、どのようなときに使用不可であるのか

上の問いに対する答えを見つけるために、本論文ではアタリとトコロの主要部名詞としての用法には何らかの制限が存在していると仮定し、両者の用法と機能について考察を行っていく。

2. 先行研究

2.1. 田窪(1984)

田窪(1984)では、日本語の「場所」名詞について述べる際に、相対名詞の特徴に触れている。相対名詞とは、左右、東西南北、上下、前後、横、そば、となり、……のように、ある名詞との位置関係を相対的に表す名詞のことであり、その特徴の1つとして、(6b)のように、文脈上省略され得る場合を除いて、基準となる名詞が与えられなければ相対名詞の指示対象が決まらないことが挙げられる。

- (6) a. 私は彼の左に立つ
b. *私は左に立つ (文脈なしの場合)

また、相対名詞の基準となる名詞は「場所」でなくてもかまわない。

- (7) a. 私は校門に立った (校門=場所)
b. 私は校門の横に立った

- (8) a. *私は彼に立った (彼≠場所)
b. 私は彼の横に立った
(a,bともに田窪 1984: 112, (86), (87)に基づく)

田窪(1984)によると、アタリとトコロは相対名詞の特徴に当てはまらないところがあるという。

アタリは他の相対名詞と異なり、「場所」を漠然と示す接尾辞的要素である可能性が示唆されている。トコロは非場所の名詞に付いて場所に変える働きがあり、場所名詞に付いて部分を表す働きがあると述べられている。

2.2. 田窪・笹栗(2002)

田窪(1984)で、トコロは場所名詞について部分化、非場所名詞について場所化の働きをすと述べていたが、田窪・笹栗(2002)ではそれを空間以外の名詞にも拡張して考えており、トコロが付け加える意味として次のように説明している。

- (9) トコロはある領域をとり、その領域内の値の候補から、トコロが付加した記述により値を1つ取り出す (田窪・笹栗 2002: 141, (18))

つまり、「Aのトコロ」は単に前接する名詞に空間的性質を与えるのではなく、ある領域を指定して全体の中の部分として記述する機能を持っている。

- (10) a. 手紙が私に来た
b. 手紙が私のトコロに来た (田窪・笹栗 2002: 140, (17))

(10)の例ではどちらも「手紙が私のもとに届いた」という解釈になるが、(10b)では特に手紙の移動の過程を表現しており、「手紙の移動」という全体の領域の中から「私」という値を取り出していると解釈できる。本論文の3.2.でこの機能を参考にして分析を進めることとする。

2.3. 益岡・田窪(1995)

益岡・田窪(1995)では、補足節の章で形式名詞のトコロについて言及している。このトコロの用法は、名詞に相当する表現に名詞の性質を与えるものであり、形式名詞コトやノと同様の働きをする。

- (11) 鈴木さんは車の調子が悪いコトに気づいた。 (益岡・田窪 1995: 182, (1))
(12) 高津さんは朝早く起きるノが苦手だ。 (益岡・田窪 1995: 182, (2))
(13) 花子は太郎がその店に入るトコロを見かけた。 (益岡・田窪 1995: 182, (3))

コトやノは広範な述語に対する補足節で用いることができる一方、トコロを取る述語は「目撃する」、「見かける」等の目撃を表す動詞や「捕まえる」、「捉える」等の捕捉を表す動詞に限られる。(益岡・田窪 1995: 183)

2.4. 砂川(1999)

アタリとトコロに関して、砂川(1999)は動詞や名詞の文法化という視点から説明している。

文法化とは「実質的な意味を持つ語が機能語へと変化すること」であり、文法化すると語彙の持つ意味がより抽象的、一般的になり、様々な形態的・統語的変化が起こる。砂川(1999)では特に、動詞と名詞の空間概念から時間概念への変化に着目した考察がなされている。

その中でアタリは接触を表す動詞「あたる」が文法化したものとされる。アタリに見られる「あたる」の痕跡はアタリが持つアスペクトの意味にあると述べている。物体が他の

物体に当たろうとするちょうどそのときという「あたる」に含まれるアスペクトの意味を受け継いで、アタリでも「事態の進展のある局面にさしかかったとき」というアスペクトの意味が表されるようになるということだ。また、この動詞は単に物理的な接触を表す動詞ではなく、物体の移動を表してもいるため、到達点を表す格助詞ニをとるとされている。

- (14) 閉会ニアタリ、ひとことご挨拶を申し上げる。 (直前の局面)
(砂川 1999: 120, (35)に基づく)

一方、トコロは場所一般を表す名詞「ところ」が文法化したものの一つとされている。名詞の「ところ」は抽象度の高い空間表現であるため、時間概念や条件概念への転写がなされやすいという。「ところ」を用いた時間表現は数多くあり、表現ごとの形態的・統語的特徴も様々であるが、いずれも動きの局面や事柄の状況を表すためのものという点が共通している。

2.5. 青木(2000)

青木(2000)において、「ところ」の文法化した表現(トコロ、トコロダ等)は、ある要素を特定化するという点で共通していると述べられている。「ところ」の文法化した表現とそれによって特定される要素の関係については以下の通りである。

- (15) a. 肉の柔らかいトコロ
(青木 2000: 84, (18))
b. 缶詰を開けたトコロ、中から金貨が出てきた。
(青木 2000: 89, (30))
c. 家に戻ると、母が台所で夕飯の支度をしているトコロだった。
(青木 2000: 93, (38))

(15a)のトコロは名詞的用法であるが、ここでは肉全体を「肉の硬さ」という観点から眺め、「柔らかい」という一つの具体的な性質や属性を取り上げてその部位を特定化している。このように、ある明示された観点から全体を視野に入れるという効果を通して、部分の特定化を図っているのである。この点は2.2.で述べた田窪・笹栗(2002)の主張と共通している。

(15b)のトコロは接続詞的に使われている。ここでは「缶詰を開ける」という行為が「缶詰の中身は何なのか」という疑問の上に成り立っていることに着目している。この例でトコロが視野に入れている全体というのは、中身を知らうとして缶詰を開けるという主体の行為の一連の過程である。トコロが用いられている時点では缶詰を開けた結果については未知なので、「缶詰を開ける」という行為の完了こそが全体であると考えられる。そして

この用法におけるトコロは、行為の完遂時を特定の状況として取り上げる。この状況があって初めて結果(中身が何であるかを知ること)にアクセスすることができるからだ。したがって、(15b)でも状況の特定化がなされていると言える。

そして、(15c)のトコロは助動詞的用法であり、この用法におけるトコロは、寺村(1992)によれば「そういう段階にある、という状況の説明のムード」を表す助動詞とされている。このトコロが表現していることは、基準時点の状況あるいは場面の特定の説明だ。(15c)の例では、家に戻ってからの一連の展開が予め想定されており、トコロの存在によってそのシナリオの中から一つが定められるという、全体に対する部分の特定化が示されている。

以上より、トコロの用法が異なっている、全体の中から部分を取り出して特定化するという働きは共通しているということが分かった。

2.6. 中村(2001)

中村(2001)は日本語の時間表現に着目し、時の従属節の節でニアタリとトコロニについて触れている。ニアタリはマエニ、サイシ等と同様に非タ形にのみ接続し、主節の出来事より前の出来事を述べる従属節(中村(2001)では「後一前の表現」)を作る接続助詞類に分類されており、これらの表現における非タ形のテンス情報について考察を行っている。これらの接続助詞を用いる際の条件として、従属節の述語と主節の述語がそれぞれ event を表す動詞であることが述べられている。

- (16) a. 遊ぶマエに、勉強した。
b. *寒いマエに、勉強した。
c. 両者が合併するニサイシ、リストラが行われた。
d. *両者が合併するニサイシ、リストラが辛かった。
(中村 2001: 145, (82)-(85)に基づく)

(16a)、(16c)は前後の節で述語が event を表す動詞となっているが、(16b)は従属節の述語が形容詞、(16d)の場合は主節の述語が形容詞となっており、上の条件を満たしていないため、非文となる。また、従属節の出来事が、主節の出来事よりも早く起こっているというテンス情報からも前後関係が固定され、これらの接続助詞が前接する動詞の形態は、非タ形になると説明している。

一方、トコロニはトキニ、サイニと同様に、タ形と非タ形にも接続する接続助詞類に分類されている。これらの接続助詞のテンス情報について、中村(2001)では従属節内の述語要素と主節の動詞の出来事時点の前後関係を指定しないため、タ形と非タ形のどちらにでも接続できると述べられている。

ここでトコロの接続について考えると、トコロは非タ形につく接続助詞と分類されるので、

テンス情報をもとにした考察も可能であると考える。

2.7. 形式名詞+ダの aspekto 的意味

日本語記述文法研究会(2007)によれば、形式名詞トコロにダがつく用法が、ある動きに対する aspekto 的な意味を表すことがある。Aspekto とは、「動きの時間的局面的な取り上げ方を表す文法カテゴリー」、すなわち、「述語動詞において成立する文法カテゴリー」のことである。動きを動きとして表す形が aspekto の無標形、動きを状態として捉える形は aspekto の有標形である。動きを表す「歩く」などは前者、状態を表す「歩いている」などは後者の形式だ。トコロダを用いた表現として～スルトコロダ、～シテイルトコロダ、～シタトコロダの3つが挙げられている。～スルトコロダは動作動詞、変化動詞に接続して動きの直前の場面を示す。ただし、場面の説明をするという特徴から、(17)のように直後にその動きが起こることが決まっていなかった場合は用いることができない。

(17) *雨が降り出すトコロダ。 (日本語記述文法研究会 2007: 55)

～シテイルトコロダは進行中の場面を現す表現である。そのため、今の場面を説明するような文脈で用いられる。このトコロダは、(18)のように結果の状態を表す～シテイルには接続しない。

(18) *古い看板が壊れているトコロダ。 (日本語記述文法研究会 2007: 55)

最後に、～シタトコロダはその動きの直後の場面を説明する表現である。動作動詞のときは動作の完了、変化動詞のときは変化の成立の直後の場面を表す。このように、トコロダを用いた表現には aspekto 的な意味を表す働きがある。

2.8. 時間節で用いられるトコロ

日本語文法研究会(2008)によると、時間節におけるトコロは、「ある状況下で新たな事態が成立すること」を表す。助詞のつかないトコロによって導かれる主節は(19a)のように無意図的な動きを表していなければならない。

(19) a. 新居に越したトコロ、電灯もなかった。
b. *新居に越したトコロ、新しい家具を買おう。

(日本語文法研究会 2008: 223)

また、助詞のつかないトコロは書き言葉的に用いられ、口語では～シタラや～スルトが

一般的である。

(20) a. 窓を開けたトコロ、富士山が見えた。
b. 窓を開け【タラ／ルト】、富士山が見えた。

(日本語文法研究会 2008: 224)

2.9. 本論との位置づけ

これまで形式名詞アタリとトコロに関する先行研究を挙げてきたが、本論文で扱うアタリとトコロの用法についてあまり論じられてこなかった。しかし、本論文の考察を通して、先行研究で扱われているアタリとトコロに関する説明の、より広い一般化に貢献したい。

3. 前接要素の制限

- (1) a. 周りに内緒で準備を進めるアタリが彼らしい
b. 周りに内緒で準備を進めるところが彼らしい
- (2) a. この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい
b. ?この町は住人が減ってきていて、そのところが少し寂しい
- (3) a. *見返りを求めない健気なアタリが彼女らしい
b. 見返りを求めない健気なところが彼女らしい
- (4) a. 窮地に立たされても決して諦めないアタリ、彼の粘り強さを感じる
b. *窮地に立たされても決して諦めないところ、彼の粘り強さを感じる

本章では上の(2)から(4)のアタリとところの前接要素に働く制限について、品詞、格助詞ノの2つに分けて考察を行う。

3.1. 品詞

本節ではアタリとところに前接できる品詞について分析する。日本語の性質上、主要部名詞に自由に前接できる品詞は限られており、動詞、イ形容詞、¹ナ形容詞、連体詞、助動詞の5種類である。本節ではこれらに連体修飾語として働く格助詞ノも加える。まず、ところの制限を考える。ところに関して容認度に問題があるのは(2b)と(4b)であるが、(4b)については後接要素が影響していると考えられるため、4.2.節で述べる。以下は各品詞にところを接続させた場合の例文と容認度である。

- (21) a. 周りに内緒で準備を進めるところが彼らしい [動詞] (= (1b))
b. 他人の失敗を責めない心の広いところが彼らしい [イ形容詞]
c. 忙しいのに仕事に全くミスのないところが素晴らしい [イ形容詞・ナイ]
d. 見返りを求めない健気なところが彼女らしい [ナ形容詞・形容詞的]
e. 彼の、何事にも動じない大人なところを見習いたい [ナ形容詞・名詞的]
f. 他人の失敗を責めない器の大きなところが彼らしい [連体詞]
g. ?この町は住人が減ってきていて、そのところが少し寂しい [連体詞] (= (2b))

¹ 本論文では日本語記述文法研究会(2010)『現代日本語文法 1』の分類に従い、形容詞をイ形容詞、形容動詞をナ形容詞として扱う。

- h. 一度言い出したら聞かないところが彼女らしい [助動詞]
i. この町は住人が減ってきていて、そこのところが少し寂しい [格助詞ノ] (cf. (2b))

(21g)以外は違和感無く前接できることが分かる。(21g)のように連体詞「その」をつけると容認度が下がりそうだが、(21i)のように「そのところ」と表現すると容認されやすくなる。しかし、(21f)を見ると分かるように、連体詞が前接する場合は例外なく容認度が下がるというわけではない。以下(21f)と(21g)の違いについて考察する。

表1は益岡・田窪(1995)の連体詞の分類に従ってまとめたものだが、左記の文献において「その」は連体詞ではなく指示詞に分類されている。

表1：連体詞の分類

分類	型	例
1	動詞の名詞修飾形式	ある、来る、かかる
2	動詞のタ形	大した、困った、ふとした
3	形容詞の名詞修飾形式	おおきな、おかしな、堂々たる
4	名詞+「の」	例の、一種の
5	その他数量に関する語	ほんの、たった、約

「その」を指示詞として扱うならば、ところの前接条件に関して「その」が連体詞「大きな」とは異なる性質を持っている可能性がある。連体詞と指示詞で容認性が異なるかを検証するために、「その」と他の指示詞との比較をする。

- (22) a. ?この町は住人が減ってきていて、そのところが少し寂しい (= (2b))
b. この町は住人が減ってきていて、そんなところが少し寂しい
c. この町は住人が減ってきていて、そういうところが少し寂しい
d. この町は住人が減ってきていて、そうしたところが少し寂しい

上の4つの例文において容認度に問題があるのは(22a)だけであった。すなわち、指示詞だから容認度が下がるということは言えないのである。上の4つの指示詞は全て同じ内容を指しているため、「そのところ」の容認度が低いのは「その」の振る舞いが他の指示詞や連体詞とも違っていることを示唆している。ところの前接要素の制限は品詞や意味役割にあるのではなく、「その」自体にあるようで、一般化が困難のように思われる。原因として考えられるのは、「町の住人が減ってきてい」という内容を他の指示語を用いて表現することが可能なため、「その」を使う必要性が無くても相対的に容認度が低くなっている

ということである。よって、トコロに関しては次のことが言える。

- (23) トコロは基本的にどの品詞にも接続できるが、指示詞「その」に関してはより適した指示語の存在により容認度が下がっている

次にアタリを接続させた例文を見ていく。

- (24) a. 周りに内緒で準備を進めるアタリが彼らしい [動詞] (= (1a))
b. *他人の失敗を責めない心の広いアタリが彼らしい [イ形容詞]
c. 忙しいのに仕事に全くミスのないアタリが素晴らしい [イ形容詞・ナイ]
d. ?見返りを求めない健気なアタリが彼女らしい
[ナ形容詞・形容詞的] (= (3a))
e. ?彼の、何事にも動じない大人なアタリを見習いたい [ナ形容詞・名詞的]
f. ?他人の失敗を責めない器の大きなアタリが彼らしい [連体詞]
g. この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい [連体詞] (= (2a))
h. 一度言い出したら聞かないアタリが彼女らしい [助動詞]
i. ?この町は住人が減ってきていて、そこのアタリが少し寂しい
[格助詞ノ] (cf. (2a))

(24b)のイ形容詞「広い」、(24de)のナ形容詞「健気な」「大人な」、(24f)の連体詞「大きな」、(24i)の格助詞ノが接続する例で容認度が下がっている。(24g)と(24i)より、「その」と「そこ」の容認度がトコロとアタリで逆転しているため、格助詞ノの接続については次節でトコロの場合と比較しながら述べる。

まず、イ形容詞とナ形容詞が容認されないのは、形容詞の持つ働きが関連していると考えられる。後にも述べるが、形容詞には限定用法と叙述用法があり、補語になることもでき名詞に付いてその名詞を修飾することもできる。また、事物を形容するという特徴は連体詞にもある特徴であり、共に容認性の低い品詞である。したがって品詞ごとの容認度にはこの性質が関わっている可能性が高い。

次に、(24bc)に着目する。同じイ形容詞でも「広い」と「ない」で文の容認度が異なるのは、イ形容詞「ない」が他のイ形容詞と違って特殊な語彙であるからだと考える。『現代日本語文法 1』でも、「特殊な形容詞」としてイ形容詞の「ない」を挙げており、その特徴として以下の2点を述べている。

- (25) イ形容詞「ない」は、存在を表す動詞「ある」の否定形に相当する機能を果たす
(日本語記述文法研究会 2010: 102 に基づく)

- (26) イ形容詞「ない」は否定と呼応する副詞とも呼応することができる
(日本語記述文法研究会 2010: 103 に基づく)

上の2点から、イ形容詞「ない」は他のイ形容詞とは違う振る舞いをする可能性が示唆されている。また、(24a)の動詞+アタリが容認されていることから、「ない」が動詞「ある」の否定形として機能しているとすれば、他のイ形容詞が容認されずに「ない」だけ容認されていることも説明がつく。(cf. (27ab))

- (27) a. 会社の同僚の、何事にも責任感のあるアタリが素晴らしい
b. 会社の同僚の、何事にも緊張感がないアタリが気になってしまう

このことから、本論文ではイ形容詞「ない」の前接が容認されることを例外の1つとして認め、ナ形容詞を含めるその他の形容詞は、事物を形容するという性質から容認性が低くなると考える。

次に、表1の分類をもとに連体詞の型ごとの語がアタリに接続できるか確認する。なお、分類5は数量名詞にのみ接続するため、下の例の中には含まれていない。

- (28) a. *あるアタリ、*来るアタリ、かかるアタリ [分類1: 動詞の名詞修飾形式]
b. *大したアタリ、*困ったアタリ、*ふとしたアタリ [分類2: 動詞のタ形]
c. ?大きなアタリ、?おかしなアタリ、堂々たるアタリ
[分類3: 形容詞の名詞修飾形式]
d. *例のアタリ、*一種のアタリ [分類4: 名詞+「の」]

分類1と分類3の一部を除いて、ほとんどの連体詞が容認できないという結果になった。分類1の「かかる」は「かくある」が由来であり、指示詞「かく」の中に具体的な内容を含むことができるため、指示詞「その」と同様に容認されると考える。全体的に連体詞が容認されにくい理由として、次のことが考えられる。連体詞は名詞を修飾する性質を持っているため、本来それ自身の持つ意味が薄れている形式名詞を修飾しようとしても文が成り立たない。「大きな」が他の分類の語に比べて容認されているのは(25f)のように「器の」という連体詞の存在をサポートする語句が前接しているからであり、「大きな」だけではアタリを修飾できない。つまり、連体詞の容認性はその前に適切な修飾語がつけられるかどうかによって依存している。分類3は形容詞由来の連体詞であるため、「器の大きなアタリ」「挙動のおかしなあたり」「佇まいの堂々たるアタリ」という風に修飾語をつけやすい。それでも、連体詞は後接する名詞を修飾するという性質のために、他の品詞と比べて容認

されにくいと考える。

最後に、「その」を指示詞と捉えて他の指示詞との比較をする。

- (29) a. この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい (=2a)
b. ?この町は住人が減ってきていて、そんなアタリが少し寂しい
c. この町は住人が減ってきていて、そういうアタリが少し寂しい
d. この町は住人が減ってきていて、そうしたアタリが少し寂しい

(29b)がわずかに違和感のある文になるが、それ以外は容認性に問題はない。よって、アタリの場合「その」は他の指示語と同じ振る舞いをすると考えてもよい。

以上のことから、「ない」を除く形容詞と連体詞はアタリに前接する場合容認されにくいことが分かる。これらの品詞に共通しているのはそれぞれ補語の役割を果たしており、事物を形容する性質を持っている点である。これは動詞などにはない働きであり、この点が容認性を分けていると考えられる。アタリの制限について明らかになったことをまとめると、次のようになる。

- (30) 形容詞や連体詞など、事物を形容する側面が強い品詞がアタリに前接する場合、容認されにくくなる（イ形容詞「ない」を除く）

本節で品詞別に前接要素の制限を考察した結果、分かったことをまとめると、以下のようになる。

- (31) トコロの前接要素は一部の指示詞を除いて広く容認されるが、アタリはイ形容詞「ない」を除く形容詞・連体詞が前接するとき、容認度が下がる

3.2. 格助詞ノ

本節では、前節で触れた「格助詞ノ+アタリ/トコロ」の容認性の違いについて検討する。

- (32) a. ?この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい
b. この町は住人が減ってきていて、そのトコロが少し寂しい

2.2.で田窪・笹栗(2002)において主張された、格助詞ノが前接する場合のトコロの機能について述べた。

- (9) トコロはある領域をとり、その領域内の値の候補から、トコロが付加した記述により値を1つ取り出す (田窪・笹栗 2002: 141, (18))

2.2.でも述べたように、(10b)の「手紙が私のトコロに来た」ではトコロが「手紙の移動」という領域を指定し、その中から（他に候補があるにもかかわらず）「私」という値を取り出している。この説明に基づいて(32b)について考えると、全体を示す領域は「町」であり、その中から「住人が減ってきている」という側面を取り出している。

一方で格助詞ノが前接するアタリは、部分を記述するというよりも、指示対象の周辺を記述する機能を持っているようだ。

- (33) ?手紙が私のアタリに来た

(10b)では「私」が「手紙」の移動の過程の一部分とされているため、「自分の住居や勤務先、または自分に直接手紙が来た」という抽象的な解釈が可能だが、(33)は容認されないことはないにしろ「手紙」が「私」のいる周辺に物理的にやってきた、という解釈しかできない。そこで、アタリについて以下の説明を提案する。

- (34) 名詞+格助詞ノに続くアタリは、その文全体に物理的な意味解釈を優先的に付与する

格助詞ノ+アタリの構造は物理的記述に特化しており、本論文で扱う「ある事物の要素・特徴とそれに対する評価・意見の記述」という用法に適していないと主張する。(24i)の容認性に問題があるのも、その表現に物理的解釈の可能性が含まれているからだと考える。

- (24) i. ?この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい

「町の住人が減っていることが少し寂しく感じる」という解釈よりも、「町の住人が減っているせいで、その周辺地点にもの寂しさを感じる」という物理的な解釈の方が自然に思われる。

また、以下の(35a)におけるアタリは、ある概念のグループに属する候補を挙げる用法であり、物理的解釈を与えるような用法ではない。しかし、アタリの前に格助詞ノを挿入すると文全体に物理的解釈を与えてしまい、(35a)と(35b)で解釈が大きく異なることが分かる。

- (35) a. 九州の温泉観光地と言ったら、別府か嬉野アタリが有名だろう
b. 九州の温泉観光地と言ったら、別府か嬉野ノアタリが有名だろう (≠(35a))

このように、アタリに格助詞ノが前接する場合いかなる用法でも物理的解釈を要求され、それが本来意図している用法としての解釈に支障をきたしている。格助詞ノが前接するアタリの制限は、場所を表す形式名詞としての性質の強い表れとすることもできる。

以上のことから、格助詞ノ+アタリ/トコロの容認度の違いを次のようにまとめる。

- (36) 格助詞ノが前接すると、トコロ文は全体とその一部という構造を作ることができ容認されるが、アタリ文は物理的な意味解釈を要求されるため容認性に問題が生じる

4. 後接要素の制限

本章ではアタリとトコロに後接する要素の制限について考察する。5.1.で格助詞ごとの容認度の違いを検証し、5.2.で読点を後接させる場合の容認度の違いについて述べる。

4.1. 格助詞

『現代日本語文法』の分類によると、日本語の格助詞はガ、ヲ、ニ、ヘ、デ、カラ、ヨリ、マデ、トの9種類である²。本節ではそれらの格助詞との接続を考察し、アタリ/トコロの格助詞の制限についてまとめる。

まず、前提条件として、この用法で用いることのできる格助詞について考える。「Xアタリ Y」という用法において、Xはある事物の要素・特徴を示し、Yはそれに対する評価・意見を含んでいる必要がある。すなわち、この用法において格助詞はこれら X と Y をつなげて日本語として正しい文を成立させる役割を担っているということだ。したがって、主要部名詞アタリとトコロに後接できる格助詞の条件について以下のことが言える。

- (37) 「Xアタリ/トコロ Y」の用法において、アタリとトコロを主要部名詞として用いる場合は、Yで評価・意見を述べるのに適切な格助詞を用いなければならない

このことを踏まえてアタリとトコロに格助詞を後接させると、格助詞ガ、格助詞ニ、格助詞ヲ以外の格助詞は(37)の条件を満たしておらず、評価・意見を表す内容を自然に接続させることができないことが分かる。

- (38) a. 周りに内緒で準備を進めるアタリが彼らしい (=1a)
b. 周りに内緒で準備を進めるアタリに彼の真面目さを感じる
c. 計画的に準備を進めるアタリを見習うべきだ
d. ?彼の場合、朝寝坊を頻繁にするアタリから改善が必要だ
e. *周りに気を遣って振る舞うアタリよりありのままにいる方が彼らしい
f. *彼は周りに内緒で準備を進めるアタリで一目置かれている
g. *彼の場合、朝寝坊を頻繁にするアタリまで改善が必要だ
h. ?彼の無責任に振る舞うアタリへ怒りの矛先を向ける
i. ?彼の無責任に振る舞うアタリと折り合いをつける

² 格助詞とその用法については、付録「格助詞と用法の対応」を参照されたい。

(39) a. 周りに内緒で準備を進めるところが彼らしい (=(1b))

[格助詞ヲ：移動の起点]

- b. 周りに内緒で準備を進めるところに彼の真面目さを感じる
- c. 計画的に準備を進めるところを見習うべきだ
- d. ?彼の場合、朝寝坊を頻繁にするところから改善が必要だ
- e. *彼は周りに内緒で準備を進めるところで一目置かれている
- f. *周りに気を遣って振る舞うところよりありのままにいる方が彼らしい
- g. *彼の場合、朝寝坊を頻繁にするところまで改善が必要だ
- h. ?彼の無責任に振る舞うところへ怒りの矛先を向ける
- i. ?彼の無責任に振る舞うところと折り合いをつける

以上より、主要部名詞としてのアタリとところの後接要素になることができるのは格助詞ガ、格助詞ニ、格助詞ヲの3つである。『現代日本語文法 2』によると、これらの3つの格助詞の用法の中にのみ「対象」という用法が含まれている。「X アタリ／ところ Y」という文において、X という性質が Y という評価(心的活動)の対象になっているとすると、アタリとところには以下の制限が働いていると考えられる。

(40) 格助詞が「対象」の用法で用いられるときに限り、アタリ文とところ文は容認される

(40)の仮説が正しいとすれば、それぞれ格助詞ガは「心的状態の対象」、格助詞ヲと格助詞ニは「心的活動の対象」の用法で用いられているときのみ容認されるということになる。

- (41) a. 周りに内緒で準備を進める[アタリ／ところ]が彼らしい
[格助詞ガ：性質の主体]
- b. 周りに内緒で準備を進める[?アタリ／?ところ]が嬉しい
[格助詞ガ：心的状態の対象]
- c. 周りに内緒で準備を進める[アタリ／ところ]に彼の真面目さを感じる
[格助詞ニ：感情・感覚の起因]
- d. 周りに内緒で準備を進める[*アタリ／*ところ]に行く
[格助詞ニ：移動の着点]
- e. 周りに内緒で準備を進める[*アタリ／*ところ]を忘れる
[格助詞ニ：心的活動の対象]
- f. 計画的に準備を進める[アタリ／ところ]を見習うべきだ
[格助詞ヲ：心的活動の対象]
- g. 計画的に準備を進める[*アタリ／*ところ]を出発する

しかし、(41a)などの例を見ると分かるように、(38)や(39)で容認されている文の格助詞には「対象」以外の用法もあり、一概に(40)のようには言えないことが分かる。つまり、「評価＝心的状態、心的活動」ではないということだ。ただし、(41d)、(41g)のように、適切な格助詞が用いられていても用法の制限によって容認されない例もある。

本節では格助詞の用法ごとの制限について一貫した規則を見つけることはできなかったが、格助詞ガ、格助詞ニ、格助詞ヲが後接する文の容認性はアタリとところで変わらないということは証明された。(cf. (41a)、(41c)、(41f))

本節で分かったことをまとめると以下ようになる。

(42) 格助詞の後接に関して、格助詞ガ、格助詞ニ、格助詞ヲが後接している文は容認され、アタリとところで容認度に差はない

4.2. 読点

本節では(4)の例文の容認度の違いについて考察する。

- (4) a. 窮地に立たされても決して諦めないアタリ、彼の粘り強さを感じる
- b. *窮地に立たされても決して諦めないところ、彼の粘り強さを感じる

(4b)のところは読点が続くと容認されなくなっているが、読点の前に格助詞ニを補うと容認されるようになる。

- (43) a. 窮地に立たされても決して諦めないアタリに、彼の粘り強さを感じる
- b. 窮地に立たされても決して諦めないところに、彼の粘り強さを感じる

佐竹(1990)で述べられている読点の使い方の1つに、「助詞を省略したところ。」とある。(4b)の読点の用法を助詞の省略と考え、以下の仮説を立てる。

(44) アタリは助詞を省略できるが、ところは助詞を省略できない

この仮説を検証するために、助詞を省略した例文を見てみる。

- (45) a. 周りに内緒で準備を進める[*アタリ／*ところ]、彼らしい
- b. 周りに内緒で準備を進める[アタリ／*ところ]、彼の真面目さを感じる

c. 計画的に準備を進める[*アタリ/*トコロ]、見習うべきだ

(45a)は格助詞ガ、(45b)は格助詞ニ、(45c)は格助詞ヲを省略したものである。トコロは全て容認されず、アタリは(45b)のみ容認される結果となった。よって(44)の仮説は一部正しくない。

次に(45b)のアタリ文が容認されることに着目して、以下の可能性を考える。

(46) アタリは格助詞ニを省略することができる

以下でアタリの後ろの格助詞ニを省略した例文を比較する。

- (47) a. 窮地に立たされても決して諦めないアタリ[に/φ]、彼の粘り強さを感じる
b. *主人公が逆境を乗り越えるアタリ[に/*φ]、感動した

(47b)のように、格助詞ニを省略すると容認されない場合もある。よって(46)の仮説も証明されなかった。

以下の例文については、格助詞ニを省略する場合としない場合で文のニュアンスがわずかに変化するように思われる。

- (48) a. 今年は早くから出し物の準備をしているアタリに、期待が持てる
b. 今年は早くから出し物の準備をしているアタリ、期待が持てる

(48ab)はどちらも日本語として正しい文であるが、(48a)は「期待が持てる」という評価を「早くから準備をしている」ことに向けているのに対し、(48b)は「準備」の先にある結果としての「出し物」に「期待が持てる」と言っていると解釈できる。「XアタリにY」においては「XにYという評価をする」という解釈に留まるが、「Xアタリ、Y」においては「Xという特徴から導き出される事物(X')に対してYという評価をする」という解釈ができる。

- (49) 「XアタリY」において、後ろに格助詞を伴わないアタリに読点が後接すると、「Xから導き出される事物X'に対してYという評価をする」という文解釈を要求するようになる

これに基づいて(4a)と(43a)の違いについても考えると、(43a)の「窮地に立たされても決して諦めないこと」に「粘り強さ」を感じている解釈になるのに対し、(4a)は「窮地に立た

されても決して諦めない」という特徴を持った「彼」に、総合的に「粘り強い」という評価を与えているという解釈ができ、(49)をアタリの機能の1つとして説明することができる。

以上のことから、アタリとトコロに関して次のことが言える。

- (50) 「Xアタリ/トコロY」において、アタリに格助詞を伴わず読点のみを後接させるとき、Yという評価の対象がXから導き出されるX'に移動するが、トコロにその用法はない

5. 本論のまとめ

これまで形式名詞アタリとトコロの主要部名詞としての制限について、前接要素と後接要素で分けて観察と分析を行ってきた。

3章ではアタリとトコロに前接する要素を観察した。3.1.で品詞ごとの容認度の違いについて考察を行った結果、以下のような結論に至った。

- (31) トコロの前接要素は一部の指示詞を除いて広く容認されるが、アタリはイ形容詞「ない」を除く形容詞・連体詞が前接するとき、容認度が下がる

一部の指示詞とは「その」のことを指しており、他の指示詞で代用できるため繁用性の無さから容認度が低いと考察した。アタリに関しては形容詞・連体詞といった事物を形容する性質の強い品詞で容認性が制限されると指摘した。この制限により、問題提起で示した(2)と(3)の容認性の違いが説明できる。

- (2) a. この町は住人が減ってきていて、そのアタリが少し寂しい
b. ?この町は住人が減ってきていて、そのトコロが少し寂しい
- (3) a. *見返りを求めない健気なアタリが彼女らしい
b. 見返りを求めない健気なトコロが彼女らしい

3.2.では格助詞ノが前接する場合の容認度の違いについて考察した。格助詞ノ+トコロに関しては、領域の中から1つの値を取り出すという田窪・笹栗(2002)のトコロの機能を用いて説明した。格助詞ノ+アタリについてはアタリが物理的解釈を要求するという機能を提案し、アタリに格助詞ノが前接すると本来の用法で解釈されにくいということを述べた。結論をまとめると以下ようになる。

- (36) 格助詞ノが前接すると、トコロ文は全体とその一部という構造を作ることができ容認されるが、アタリ文は物理的な意味解釈を要求されるため容認性に問題が生じる

このことから、「そのアタリ」が容認されにくく「そのトコロ」が容認される理由を明らかにできた。

続いて4章では、アタリとトコロの後接要素について格助詞と読点の後接とに分けて考察した。

4.1.で後接する格助詞の条件について考察を行った。まず、本論文で扱うアタリとトコロの用法に適する格助詞であることを前提として、(37)の条件を提案した。

- (37) 「Xアタリ/トコロ Y」の用法において、アタリとトコロを主要部名詞として用いる場合は、Yで評価・意見を述べるのに適切な格助詞を用いなければならない

この条件に当てはまるのは格助詞ガ、格助詞ヲ、格助詞ニの3つだけであった。さらにこれらの格助詞にのみ見られる「対象」という用法があり、このことが格助詞の後接条件に関わっていると考察して分析を行ったが、明確な答えは得られなかった。文が容認されるか否かの区別は格助詞の用法だけでは説明しきれない部分もあったため、格助詞の用法と容認性については課題の残るものとなった。4.1で得られた結論は以下ようになる。

- (42) 格助詞の後接に関して、格助詞ガ、格助詞ニ、格助詞ヲが後接している文は容認され、アタリとトコロで容認度に差はない

最後に、4.2.で考察した読点が後接する場合についてまとめる。(4)で、アタリに読点が後接する場合は容認され、トコロに読点が後接する場合は容認されないことに着目して、読点が後接する場合のアタリとトコロの機能の違いについて考察した。その結果、アタリとトコロに関して以下のことが分かった。

- (50) 「Xアタリ/トコロ Y」において、アタリに格助詞を伴わず読点のみを後接させるとき、Yという評価の対象がXから導き出されるXに移動するが、トコロにその機能はない

このアタリとトコロの機能の違いによって、(4a)と(4b)の容認性の違いが説明できる。

- (4) a. 窮地に立たされても決して諦めないアタリ、彼の粘り強さを感じる
b. *窮地に立たされても決して諦めないトコロ、彼の粘り強さを感じる

本論文で得られたそれぞれの制限を形式名詞ごとにまとめると、次のようになる。

- (51) アタリ文は、形式名詞アタリにイ形容詞「ない」を除く形容詞と連体詞、格助詞ノが前接する場合、また、格助詞ガ、格助詞ヲ、格助詞ニ以外の格助詞が後接する場合に容認性が制限される

- (52) トコロには一部の指示詞を除いてどの品詞でも前接することができるが、格助詞ガ、格助詞ヲ、格助詞ニ以外の格助詞、格助詞を伴わない読点が後接する場合、トコロ文の容認性が制限される

最後に、本論文で扱えなかった部分や考察を通して見えてきた今後の課題について述べておく。

まず、3.1.で品詞ごとの容認度を考察したとき、動詞は容認されるとまとめたが、時制やアスペクトの変化による容認性の違いについて考察できなかった。4.1.の格助詞については、格助詞ガ、格助詞ヲ、格助詞ニの用法ごとの制限について踏み込んだ議論ができず、課題の残るものとなった。また、「Xアタリ／トコロY」のY部分が評価・意見を表すと述べているが、例文の容認性を見るにあたってその判別が困難なときがあった。したがって、何をもって評価・意見とするのか明確な定義をする必要がある。最後に、本論文では前接要素と後接要素に分けて容認度への影響を考察したが、前接要素と後接要素が互いに容認度に影響しあっている可能性について触れることができなかった。以上の点を今後の課題とする。

6. 参考文献

- 青木三郎(2000)「<ところ>の文法化」青木三郎、竹沢幸一(編)『空間表現と文法』pp.77-103. 東京：くろしお出版
- 有田節子(2007)『日本語条件文と時制節性』. 日本語研究叢書 20. 東京：くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則(1995)『基礎日本語文法—改訂版—』. 6. 東京：くろしお出版
- 中村ちどり(2001)『日本語の時間表現』. 日本語研究叢書 14. 東京：くろしお出版
- 日本語文法研究会(2007)『現代日本語文法 3』. 東京：くろしお出版
- 日本語文法研究会(2008)『現代日本語文法 6』. 東京：くろしお出版
- 日本語文法研究会(2009)『現代日本語文法 2』. 東京：くろしお出版
- 仁田義雄(2009)『日本語の文法カテゴリをめぐって』. 仁田義雄日本語文法著作選第 1 巻. 東京：ひつじ書房
- 佐竹秀雄 (1990) 「読点の打ち方-実例分析(文章作法便覧—すぐ役に立つ文章の書き方早分かり!)—(技法焦点)」『国文学解釈と教材研究』第 35 巻, 第 15 号, pp.73-77.
- 砂川有里子(2000)「空間から時間へのメタファー—日本語の動詞と名詞の文法化—」青木三郎、竹沢幸一(編)『空間表現と文法』. pp.105-142, 東京：くろしお出版
- 田窪行則(1984)「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」田窪行則(著)『日本語の構造—推論と知識管理—』. pp.101-124, 東京：くろしお出版
- 田窪行則・笹栗淳子(2002)「日本語条件文と認知的マッピング」大堀壽夫(編)『認知言語学 II：カテゴリー化』. pp.135-161, 東京：東京大学出版会
- 田窪行則(2008)「日本語における固体タイプ上昇の顕在的な標識」田窪行則(著)『日本語の構造—推論と知識管理—』. pp.125-142, 東京：くろしお出版
- 田山のり子(1982)「現代日本語における「ところ」—その意味と用法—」国語学研究と資料の会(編)『国語学研究と資料』. 第 6 号, pp.1-11.

7. 付録. 格助詞と用法の対応

格助詞と用法の対応

格助詞	用法	例文	
が	主体	動きの主体	子どもたちが公園で遊ぶ。(意志動作の主体) 弟が女の子から花束をもらった。(受身的動作の主体) 雨が降る。(自然現象の主体) 洪水で橋が壊れる。(変化の主体) 田中が弟の成功を心から喜んだ。(心的活動の主体)
		状態の主体	このホテルには有名なレストランがある。(存在の主体) この子が専門書が読めるはずがない。(能力の主体) 君が悲しいときは、私も悲しい。(心的状態の主体) 今朝は空がとてきれいだ。(性質の主体) このマークが進入禁止を表す。(関係の主体)
		同定関係の主体	あの眼鏡をかけた人が田中さんだ。
		心的状態の対象	恩師の死が悲しい。
		能力の対象	この子は逆上がりができる。
	所有の対象	私には大きな夢がある。	
	を	変化の対象	ハンマーで氷を砕いた。(形状変化の対象) 花を鉢から花壇に移した。(位置変化の対象) 植木を買った。(状況変化の対象) 小説を書いた。(産出の対象)
		動作の対象	太鼓をたたく。(働きかけの対象) 市町村合併問題を議論する。(言語活動の対象)
		心的活動の対象	友人との約束をすっかり忘れていた。
		起点	移動の起点 昨日は8時に家を出た。
経過域		空間的な経過域 川を泳いで渡った。 時間的な経過域 お正月を実家で過ごした。	
に	着点	移動の着点 子どもが学校に行く。(到達点) 糸くずが服につく。(接点) 変化の結果 信号が青に変わる。	
	相手	動作の相手 隣の人に話しかける。 授与の相手 おばあさんが孫に絵本をやる。 受身的動作の相手 犯人が警察に捕まった。	
	基準としての相手	体格が大人にまさる。	
	場所	存在の場所 机の上に本がある。 出現の場所 あこに鼠が生える。	
	起因・根拠	感情・感覚の起因 職員の横柄な態度に腹を立てる。 継続的状态の起因 潮風に帆が揺れていた。	
と	主体	状態の主体 私には大きな夢がある。(所有の主体) この子に専門書が読めるはずがない。(能力の主体) 私には弟の成功が心からうれしい。(心的状態の主体)	
	対象	動作の対象 親にさからう。 心的活動の対象 先輩にあこがれる。	
	手段	内容物 新入生の顔は希望にあふれている。 付着物 全身が泥にまみれる。	

で	時	時点	1時に事務所に来てください。(時名詞) 午前中に用事を済ませた。(期間名詞)	
	領域	認識の成り立つ領域	私には、山本さんの意見は刺激的だった。	
	目的	移動の目的	母が買い物に行く。	
	役割	名目	お礼に手紙を書く。	
	割合		1週間に2日は酒を飲んでいる。	
	へ	着点	移動の方向 船が港へ向かう。	
	で	場所	動きの場所	庭で犬が吠えている。
		手段	道具	ナイフでチーズを切る。
			方法	遠近法で図を描く。
			材料	千代紙で鶴を折る。
構成要素			委員会は5人のメンバーで構成される。	
内容物			会場が入でいっぱいになる。	
付着物		服がホコリで汚れる。		
起因・根拠		変化の原因	強い風で看板が倒れた。	
		行動の理由	急用で家へ帰った。	
		感情・感覚の起因	友人とのことで悩んでいる。	
	判断の根拠	隣の部屋の人物がだれなのか、甲高い声でわかった。		
	主体	動きの主体	私と佐藤でその問題に取り組んだ。	
限界	範囲の上限	先着30名で締め切る。		
領域	評価の成り立つ領域	富士山が日本でいちばん高い山だ。		
目的	動作の目的	観光で京都を訪れた。		
様態	動きの様態	裸足で歩く。		
から	起点	移動の起点	子どもたちが教室から出てきた。	
		方向の起点	ここから富士山がよく見える。	
		範囲の始点	本を10ページから読み始める。	
		変化前の状態	信号が青から黄に変わる。	
		主体	動きの主体	私から集合時間を連絡しておきます。
	起因・根拠	出来事の原因	たばこの火の不始末から火事になった。	
	判断の根拠	隣の部屋の人物がだれなのか、甲高い声からわかった。		
	経過域	空間的な経過域	虫は窓から出ていった。	
	手段	構成要素	国会は衆議院と参議院から成り立っている。	
	より	起点	移動の起点	遠方より友来たる。
方向の起点			これは東京タワーより撮影した富士山の写真である。	
範囲の始点			本を10ページより読み始める。	
変化前の状態			書類の提出期限が2月末より3月末に変更された。	
着点			範囲の終点	子どもが学校まで自転車で行く。
と	相手	共同動作の相手	友達と喫茶店でコーヒーを飲んだ。	
		相互動作の相手	弟とけんかをする。	
	基準としての相手	弟と趣味が違う。		
	着点	変化の結果	氷が溶けて水となる。	
	内容		あの方は恩師と呼べる。	

(日本語文法研究会 2009: 5-6)

8. 謝辞

本論文を執筆するにあたり、指導教官の上山あゆみ先生にはご多忙の中、丁寧なご指導をいただきました。論文の方針から細部の表記の仕方に至るまで、様々な質問・相談に乗ってくださり、大変励みになりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。また、言語学研究室の院生の皆様をはじめ、たくさんの方々に支えられて本論文の完成に至ることができ、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。